

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School

Vol. 73, No. 3 (2006年6月発行)

Summary

Journal of Nippon Medical Schoolに掲載しましたOriginal論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

Frequency and Effects of Bacterial Infection in Children with Influenza Under Oseltamivir Treatment

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 122-128)

Oseltamivir 療法下におけるインフルエンザ患児の細菌感染頻度と臨床経過への影響

二宮恵子¹ 万里小路直樹² 初鹿野美春² 川畑 建²
松岡和彦² 福永慶隆²

¹日産厚生会玉川病院小児科²日本医科大学小児科学

Oseltamivir 療法下のインフルエンザ患児で発熱が遷延することがあるが、その原因は解明されていない。一方、インフルエンザウイルスと細菌の相互作用が報告されているが、臨床経過との関連は明らかではない。今回インフルエンザ患児の咽頭培養を施行し、病原菌の検出頻度と臨床経過から抗菌薬の必要性を検討した。対象は2001年12月より2002年3月までと2002年12月より2003年3月までの2シーズンに玉川病院でインフルエンザの診断を受けた患児387人、対象は健康保育園児109人である。発症から48時間以内に咽頭培養を施行し、oseltamivirを投与、臨床経過を観察記録した。病原菌検出頻度はインフルエンザ患児では54.3%、健常児では23.9%、最も高率に分離した病原菌は前者では肺炎球菌(49.7%)、後者ではインフルエンザ菌(69.2%)であった。常在菌のみの群では4.1%で4日以上発熱を認め、4日目の再度咽頭培養では全例から病原菌を検出した。病原菌検出群で抗菌薬投与を受けなかった患児では40.3%が4日以上発熱を認めた。以上よりoseltamivir療法下のインフルエンザ患児で発熱が4日以上続く場合は抗菌薬の投与が必要と考えた。

Significance of Noninvasive Diagnosis of Prostate Cancer with Cytologic Examination of Prostatic Fluid

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 129-135)

前立腺液細胞診を用いた非侵襲的前立腺癌診断の意義

陳 海文¹ 坪井成美² 西村泰司² 斉藤友香²
近藤幸尋² 木村 剛² 杉崎祐一³

¹中国西安交通大学第二医院泌尿外科²日本医科大学泌尿器科学³日本医科大学付属病院病理部

目的：経直腸的前立腺超音波検査を用いた前立腺生検のときに、前立腺液(PF)は簡単に採取できることを発見し、PFの細胞診の前立腺癌診断における価値を再評価した。

方法：患者は2005年5月から9月の間で前立腺生検を受けた53名で、年齢は 66.7 ± 7.24 歳で、PSAは 15.1 ± 25.8 ng/mlであった。生検を実行する前にPFを採取して、パニコロー染色を行った。細胞診の結果はクラス1から5で示された。細胞診と前立腺組織病理診断の結果との関係を分析し、ANOVAによって、患者の年齢、PSA濃度、細胞学総前立腺ボリューム(TPV)、PFボリュームと細胞診結果の関係を調べた。

結果：平均PF量は 378.4 ± 245.3 ulで、平均TPVは 38.0 ± 18.8 mlであった。クラス1から5の患者数は1(1.9%)、37(69.8%)、11(20.7%)、1(1.9%)及び3(5.7%)であった。病理学の結果は、53名の中で、癌は23名(43.4%)、前立腺肥大症27人(50.9%)および高度の前立腺上皮内新生組織形成(HGPIN)3人(5.7%)であった。3名のクラス5患者は前立腺癌が証明された(グリーソンスコアが7から10)。PSA値が16 ng/ml以上の9人の患者がすべて癌と診断され、100%の特異性と33.3%陽性率が示された。その外、患者の年齢、TPVおよびPFボリュームには細胞学のクラスとの有意差はなかった。

結論：前立腺癌の診断において、特にPSA高値患者に対して、PF細胞診は非侵襲的、しかも価値のある方法であることが示唆された。